

新刊紹介

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『開発経済を学ぶ』

福井清一 著 | 創成社、2019、273pp.

貧困や飢餓の撲滅、初等教育の普及などを目指してミレニアム開発目標 (MDGs) が国際社会共通の目標として採択され、一定の成果をあげてきたが、発展途上地域の貧困問題が解決されたとは言えない。そのためMDGsの後継となる持続可能な開発目標 (SDGs) が2015年国連で採択され、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指して国際社会が取り組んでいるところである。貧困問題は経済開発、社会開発、人間開発、農村開発など様々な側面から考えなければならない。

本書は発展途上国の経済開発と開発援助を2部に分けて解説している。第1部では、経済開発を理解するための開発経済学の理論、数量分析の手法や行動経済学的手法について説明した上で、経済成長と生産要素の関係を成長理論に基づいて説明している。また、開発援助の歴史や開発援助プロジェクトについても説明している。第2部では、発展途上国の農村開発や人間開発などを中心とした開発政策について解説している。

グローバル化が進む中で発展途上地域の開発問題への関心が高まっている。本書は発展途上国が抱えている貧困問題を理解したうえ、開発理論に基づいて貧困問題を解決する手がかりを与えてくれる。発展途上国の開発や国際協力に関心を持っている人には非常に役立つ1冊である。

評／滋賀大学経済学部教授／金秉基

『ブラック職場があなたを殺す』

ジェフリー・フェファー 著 (村井章子 訳) | 日本経済新聞社、2019、312pp.

衝撃的なタイトルである。原題は、*Dying For a Paycheck*である。本書は、アメリカのストレスフルな職場環境・労働慣行がいかに労働者や社会に悪影響を及ぼすのか、そこからの脱却はいかにしてなされるのかを論じている。

本書では統計データや調査結果を駆使しつつ、悪しき職場環境・労働慣行が不適切な食習慣、アルコールや薬物への依存、PTSD、疾病、暴力、脅迫、自殺などの起因となっている事例を紹介する。それは労働者の心身や家族関係に悪影響を及ぼすだけでなく、医療・福祉の社会的コストをも、もたらしている。他方で、インターネット等を介した働き方の普及は人々に常に「臨戦態勢」を強いているとも述べている。冠婚葬祭や有給休暇の時さえ、会社への返信業務は待つてはくれないようだ。本書がアメリカの職場実態や働き方を考察しつつも、日本の「使い捨て」の職場と重なってくる。

著者はコストや生産性への傾注ではなく、「働く人の心身の健康と幸福」の順位をいかに上げ、働く者が大切にされる「健全な職場」の実現が劣悪な職場からの脱却の策と提唱する。読者はきっと、そうした視点からあらためて職場を見渡してみたくなるだろう。

評／『彦根論叢』編集委員／山田和代

